Journal of Asian and African Studies, No.93, 2017

【論　文】

戦後台湾における脱日本化再考
代行された脱植民地化の視角から

森　田　健　嗣

De-Japanization on Post-War Taiwan from the Perspective of Vicarious Decolonization

MORITA, Kenji

This paper discusses the "De-Japanization" of post-war Taiwan from the perspective of vicarious decolonization. Further, this paper refers to the example of post-war Korea, which was under the Japanese colonial regime. The decolonization of Taiwan did not proceed as Taiwan's identity and state formed. The decolonization of Taiwan progressed vicariously through the Sinicization by the Republic of China. Taiwan was not de-colonized due to its own identity and the nation's formation. The decolonization progressed vicariously as the Republic of China controlled the Sinicization of Taiwan. "Japan" in post-war Taiwan fought the Sino–Japanese War for administrators who had come from mainland China, but Japan had also governed Taiwan for fifty years. In other words, Taiwan's national integration was one-sided with regard to "Sinicization" and "De-Japanization" after the war. The ruler's historical background and the enemy's characteristics were taught in schools; however, the memorization-based education and experience in colonial Taiwan did not sustain and went obsolete in schools, also it could not be shared with the younger generation in families. Moreover, "Japan" was removed from the townships or rural areas of Taiwan as far as the rulers were concerned. Martial law and white terrorism raged for about forty years, thus Taiwanese people kept quiet. The will of "De-Japanization" of Taiwanese who ruled over colonial Japan was not expressed. However, in post-war Korea, the ruler and people shared "De-Japanization" as a categorical imperative word. When "Japan" came to Taiwan in the period between 1950s and 1960s, for instance, by way of Japanese cinema, Taiwanese people were excited about it against the ruler's motives. It can be said that the de-colonization of Taiwan progressed vicariously. Consequently, it was different from other de-colonized regions; therefore, "Japan" did not find an "enemy" in post-war war Taiwan. Rather, "Japan" was a self-protection tool for Taiwanese people who were ruled over by colonial Japan. Therefore, "Japan" was relativized in post-war Taiwan.

Keywords: Vicarious Decolonization, Sinicization, De-Japanization, Attitudes toward Japan, Taiwan

キーワード： 代行された脱植民地化，脱日本化，中国化，日本観，台湾

1. はじめに
2. 戦後初期（1945–49）における脱日本化
2.1 自律的脱植民地化から代行された脱植民地化へ
2.2 学校における脱日本化
3. 一大中国化と日本
3.1 学校における一大中国化教育と脱日本
3.2 社会全般における脱日本化の進展
4. おわりに

1. はじめに

本稿は戦後台湾[1]における脱日本化について論じる。この課題は文化人類学からは五十嵐・三尾編［2006］, 黄［2006］［2012］等が, 地域研究からは菅野［2011］, 若林［2015］, 所澤・林編［2016］等が触れている。本稿では先行研究を参照しつつ韓国との比較を行いながら[2], 戦後台湾では脱植民地化が代行された[3]という視角から論を進める。なかでも脱植民地化の有り様を説明する題材として相応しい学校教育の検討や[4], 先行研究では触れられていない視点, すなわち脱植民地化が代行されたことで植民地時期生まれの世代と戦後世代の間で記憶が継承されず, 断絶されたという点から再考し意義付ける。この作業を進めるため, 本稿は戦後台湾史研究の最新成果や近年公刊された資料を引用する。そして戦後台湾では「日本」はあまり批判すべき対象とならず,「他者化」して国民統合の機能を果たさなかったことの指摘が本稿の目的となる。

日本統治を経験した本省人[5]からの視角である「脱植民地化の代行」をさらに説明する。国民党政権の「公定中国ナショリズム[6]」は, 畢竟外来的なものであり, それに基づく脱植

1) 1945 年以後の台湾について「戦後」ということばがよく用いられる。だが「台湾, 朝鮮, 中国…, 東アジアではもう一度戦争が始まった……『戦後』は, 日本にしかない。日本はズルをしてきた。だからアジアに対して『戦後』という言葉を使う場合は, もっと慎重に使ってもらわないといけない」といった批判や［劉 2006: 232］, 台湾に関わる戦争関係と, それに伴う「戦後」関係は 6 種類あるという指摘がある［黄 2012: 63–64］。筆者はこうした指摘に留意しつつ「第二次世界大戦終結後」, 特に「1945 年 8 月 15 日」を境として「戦後」という語句を用いる。また本稿は主として漢民族が居住する台湾平野部での事柄を検討対象とする。

2) 韓国を比較対象とし台湾を考察することはそれほど目新しいことではない。例えば若林［2008b: 285–291］は, 脱植民地化の諸側面として両者の「植民地遺制の克服」,「新たな国家建設」,「経済的自立」,「政治的民主化」などを図式化し説明している。

3) まず黄［2006: 167］が台湾で出版された「日本文化論」に関する数多くの書物の分析を通じて提起した。続いて若林［2008b: 290］が次のように把握している。統治エリートから見れば自身の「中華民族」観に沿り「反共復国」を堅持し政治警察を抱えて進める脱植民地化が台湾の脱植民地化に他ならなかった。植民地統治を受けた人々からすれば「代行された脱植民地化」となり, そこに生じた抑圧は政治エリートの二重構造や「台湾的なるもの」からの価値剥奪という不平等な構造を伴った。ゆえに一種の植民地性があり, 本省人側からはそのように感得されることが多かったとする。森田［2014a］はこの把握を引用し, 戦後初期台湾社会と言語政策について再考し論じている。

4) 台湾の学校教育については植民地期のものが膨大にある。近年の成果として陳［2015］, 山本［2015］, 林［2015］などを挙げることができる。戦後期, とくに戦後直後から 1950 年代の教育に関する研究は筆者の管見の限り, 王［2008］, 林［2009］, 王［2010］, 張［2010］, 管・王［2011］, 王・管［2013］, Chang［2015］が存在する。いずれも国民党一党支配時期の国是を伴う教育政策を議論の中心に据えているが, 教育の受け手に触れるものはあまりなく実態が不明瞭である。本稿で引用する深串［2014］, 森田［2014b］は, 教育現場で教えられる為政者側から見た「日本」表象に若干触れているが, 上に掲げた戦後台湾教育研究ではこのことを議論していない。検討の余地は非常に大きく, 今後への課題も多い。

5) 1945 年以前から台湾に居住する人々で人口上の多数派であり, 民主化に依りエンパワメントされる立場にあった［若林 2008a : 3］。

民地化は代行的なものとならざるを得なかった。戦前にプランされた中国での台湾接収策は，植民地統治下の被支配者は不在だったこともあり[7]，「植民地性」をともなう代行は「二・二八事件[8]」による国民統合の破たんではなく，予め宿命づけられていたようにもみえる。

だが日本語を含む「日本」を排除する過程において，本省人は一時期，新たな「祖国」を歓迎した。一例として自ら進んで「国語」（中国語）を学んだことが挙げられる［森田 2014a］。しかもその宿命づけられた空間にも，後述のとおり自律的な脱植民地化の動きが存在した。そして新たな統治者である国民政府が友好的に台湾を接収していれば被支配者である本省人との間に摩擦は起こらなかったかもしれない。ところが二・二八事件により国民統合が破たんしこの動きは断たれた。代行は破たんの後に始まった。ここで「代行された脱植民地化の植民地性」が改めて指摘されることになる。

こうして脱植民地化の過程は本省人の主導で行われたのではなく，新たに統治権を取った国民政府によって行われ，さらに 1950 年代からの国民党中央政府の台湾移転にともなう「中央化[9]」以後は次の展開がみられた。

国民党政権に台湾内部から挑む力が微弱だった 1950–60 年代[10] の政権による台湾社会に対する一大「中国化」，「中国人になるために学ぶ」（Learning to be Chinese）こと

6）B. アンダーソンの「公定ナショナリズム」を下敷きとした若林の造語である。中華民国は清帝国の領域を引き継ぎ，そこに近代国民国家を建設しようとする中国ナショナリズムのプロジェクトの産物である。そのため一種の「国民帝国」であり，その点で国家権力による国民統合イデオロギーとしての中国ナショナリズムもまた公定ナショナリズムと性格づけられる。そのうえで，戦後台湾の中華民国は，中国大陸における広大な周縁地域を失ったものの「反共復国」の国策とともにそのイデオロギーは保持したとする［若林 2008a: 415–416］。

7）台湾接収政策は抗日戦争中から準備が進められ，1944 年に中央設計局のもとに陳儀を主任委員とする台湾調査委員会を設け，台湾接収プランを立案し「台湾接管計画綱要」を完成させた［近藤 2004: 135］。中国国民党政府は，台湾から来た革命家より台湾光復のヴィジョンを求め，陳儀を首班とする台湾調査委員会で台湾光復の具体的方法を模索するが，中国にとって台湾の中国復帰の方法は台湾社会の中国化しか考えられなかった。台湾革命同盟会が主張した戦後建設プランの中での台湾の独自性は中国国民党側に受け入れられず，台湾接収にあたる人員からも台湾出身者が排除された［近藤 1996: 667］。

8）1947 年 2 月 27 日夕刻，台北市内の路上でヤミ煙草を売っていた寡婦が取締中の省公売局職員に殴打される事案が発生，民衆がこれに憤慨し公売局職員を取り囲み，職員は現場から逃れようとして発砲，流れ弾を受けた民衆の 1 人が死亡した。翌日台湾省行政長官公署へ抗議に赴いた民衆に対し警備兵が発砲，多くの死傷者が出てこれが引き金となり台北市内で暴動が発生し，全島の都市に波及した。3 月 8 日に国府の増援部隊が到着すると台湾住民に対し，無差別殺戮を含む過酷な弾圧を加え，1 万 8 千人から 2 万 8 千人が犠牲となった［何 2011：208–209］。

9）中華民国史の場合「中央政府が撤退・移転することによりある地方に中央的性質を有する組織，機能などが集中すること」を指す。抗日戦争期，日本軍の中国大陸侵攻とともに蔣介石は中央政府を重慶に移した。49 年 12 月中央政府の台北移転により台湾は「中央化」した。これは四川省「中央化」に次ぐ 2 度目の事例である。これにより戦後台湾では政治エリートのエスニックな二重構造を助長し，憲法の規定する「省自治」が歪められた［若林 2008a: 75–76］。

10）林献堂の例が挙げられる。1955 年 10 月 14 日，林は台湾を蔣介石独裁の法治に欠ける「危邦」「乱邦」と断じた。林は 1956 年 9 月 8 日東京久我山の居宅で死去し 21 日台北に帰着した。林が日本軍国主義，蔣介石政権の双方にその気節を守り通したことを示したが，現実政治において大勢の赴くところを如何とすることも出来なかったことも示し，いわば台湾土着地主階級勢力の遅れてきた政治的死亡通知であった［若林 2011: 123–124］。林献堂（1881–1956）は，台湾中部の大資産家，名望家霧峰林家を率いた当主で日本植民地統治期から戦後初期にかけて「台湾筆頭社会領袖」として台湾社会に重きをなした人物である。植民地下，林は台湾文化協会の活発な文化啓蒙運動や一種の植民地自治運動である台湾議会設置請願運動など，穏健派（右派）民族運動でも大きな役割を果たした［若林 2011: 109］。文学作家の葉石濤は当時の政府の粛清が「虫の息で喘いでいる台湾の知識人を無用の長物に変えてしまった」と言い表している［中島・河原・下村編 2014: 224］。

とは，本省人にとり統治エリート，したがって遷占者集団のエリートが提示する主流文化に同化することだった［若林 2008a: 78］。すなわち，戦後すぐの頃の光景から一変し脱植民地化の代行が貫徹された。そして東西冷戦の「前哨基地国家」として米国の庇護下に入った「中華民国」は，「反共復国」の国是により統治領域の大幅縮小にも関わらず全中国の統治を前提とした機構を維持し，枢要部分を蔣介石と共に来台した外省人[11] エリートが独占した。そして上述の公定中国ナショナリズムに基づき，各族群（エスニック・グループ）の母語や台湾的なるものは，国語と中華のハイカルチャーよりも下位となり貶められた［若林 2008b: 289］。さらに長期戒厳令（1949–1987）と白色テロ[12] により，言論その他の自由や多くの生命が奪われた[13]。こうした「対照群」が現れたことで，植民地時代に対し相対的に美しい追憶が引き起こされ，植民地期を過ごした者が日本統治期に対し「好感を持つ」誘因となった［蔡 2006: 29–34］。2 つの時代を比較する視点を持たされ[14]，旧宗主国に対し構築するイメージは，新たな支配者（即ち国民党政権）との関係のなかで操作される対象となり［三尾 2014］，新たな支配者の日本経験を相対化するに至った［若林 2015: 52–53］。

上述した諸状況は同じく日本の植民地支配下にあった韓国と大きく異なる。周知の通り韓国は日本の植民地支配を受けた経験のみならず，戦後における独裁体制と民主化運動の展開や急激なスピードでの経済発展［木宮 2003］，それに起因する社会の構造[15] など台湾と類似した歴史を持つ。だが 1945 年の解放以降の韓国社会において，「日本帝国主義の残滓の清算」は一種の定言命令で，最優先された清算の対象は日本語であり，それが民族文化建設の先決課題だった［金 2015: 205–

11）1945 年以後に国民党政権とともに渡来した人々で，党・政・軍・文化機構において要職を占め，人口上のマイノリティではあるが，戦後台湾国家において本省人に対して構造的優位を占めていた［若林 2008a: 3］。近年の研究［林 2009: 323–336］によれば，1945 年から 1953 年の間に来台した外省人数は約 120 万人である。

12）1949 年の「四六事件」（軍人と警察が台湾大学と台湾師範学院に押し入り学生を逮捕した事件）から始まり，1992 年の刑法第百条（国体の破壊や転覆活動を取り締まる法律）改正に至るまで続いた。1950 年代は国民党が最も多くの人を捕まえた年代で 1950–53 年が一番多く，その後徐々に減少した。政治案件は多くが共産主義者あるいは中国共産党の地下組織に関してだが，60 年代以後台湾独立運動に関する案件が増えた。戒厳時期軍事法廷が受理した政治案件は 29,407 件，無実の罪を着せられた受難者は約 14 万人に達するが，20 万人以上という計算もある。しかし実際に逮捕された人数はどれくらいか今のところ定説はない［張 2013: 284–288］。当時を語る文献は枚挙に暇がないが（一例として牧野［2011: 208–244］のインタビュー調査），周［2013: 313–314］から引用すると，李遠哲（1936–，ノーベル化学賞受賞，中央研究院元院長）は高校時代を次のように語る。「ある日物理の授業のとき，校長が出席簿を持って入ってくると，何々と名前を呼んだ。友人は立ち上がると泣き始めた。窓から外を見ると，下にはジープが 2 台止まっていて，私服を着た憲兵が建物を取り囲んでいた。……彼は連れて行かれてしまった。……母は，次は私だ，同じように戻ってこないかもしれないと思った。この友人は何年かたって釈放されたが，すでに精神に錯乱を来していた。」全貌を明らかにした近年の研究書として，蘇［2014］がある。

13）戦後台湾における人権迫害の全貌は薛・蘇・楊［2015］を参照。

14）言語学者王育徳はこの比較対照の心情を次のように述べている。「一千万の台湾人の大多数は，この 2 つの時代にまたがって生きてきたのであり，かれらが何かにつけて，2 つの時代を比較することは，転居したときに，以前の家と現在の家を比較するように，人情の常であって，ここでもし，日本時代の方がマシだったという結論でも出ようものなら，事態は重大といわねばならない。……台湾人にしてからが，日本時代と国府時代を同じ次元から比較する身になろうとは，ツユ思わなかったのである。」［王 1970: 103–104］

15）教育に関していえば，日本，韓国，台湾のいずれも，人々の高い教育熱に後押しされる形で高等教育がかなりのスピードで拡大した。そして必然的な帰結として労働市場に新規参入する労働力の学歴も大きく上昇した［有田 2011: 4］。

206］。朝鮮半島における封建王国から国民国家への転化の胎動は19世紀末に出現し，国民意識は日本の植民地統治期に生じた反日的ナショナリズムによる動員過程で成熟した［呉 2010: 116］。解放以降の韓国社会で「日本」は新たな国民統合でなくてはならない存在となり，韓国ナショナリズムでの「日本」は「韓国人」を創り出す最も重要な道具として機能した［金 2015: 224–225］。

アメリカ社会史研究者ボドナー［1997］の研究を整理した和田［2005: 114］から引用すると，「国民」を創り上げるには国家権力による統御装置とともに，構成員自身が国家という巨大な共同体に対して帰属意識を育む装置が必要とする。国民とは上から創り上げられ，構成員自らも下から創り上げ，これが国民化の巧妙なメカニズムとなる。つまり中央エリート層＝「公式文化」の側の操作（名づけ）と，地域の民衆＝「ヴァナキュラー文化」側の主張（名乗り）がせめぎ合い，その中から国の公的記憶が紡ぎ出される。この説明に照らせば韓国では民主化以前であっても為政者と被統治者が「脱日本」という共通の定言命令のもと国民国家形成が進められたと言えそうである。

一方，台湾の脱植民地化は自らのアイデンティティや国家の形成ではなく，中華民国が台湾を「中国化」する「代行」された形で進行した。為政者や外省人にとり「日本」は日中戦争を戦った相手だが，本省人にとれば台湾を50年統治した存在だった［川島 2014: 46］。このことから，双方に共通した「脱日本化」の概念は持ち難く，為政者からすれば「国民」を創り上げることの困難さがひとまずうかがえる。

筆者は韓国の状況に目配りしつつも，脱植民地化が代行されたという視角から本稿の掲げる課題を論じる[16]。また国民党中央政府の台湾移転後，上からの一大「中国化」と「日本」の排除という代行された脱植民地化の貫徹は第3節の1950年代以後であるため，次節ではその理解の前提となる戦後初期の考察を中心に据える。

2. 戦後初期（1945–49）における脱日本化

2.1 自律的脱植民地化から代行された脱植民地化へ

植民地期の1920年代から30年代にかけて，台湾知識人の様々な政治運動，社会運動，文化運動の諸言説により台湾の人々に「台湾意識」が形作られた［若林 2004: 113］。しかも終戦直前には，「国語」（日本語）がすでにある程度普及していた[17]。戦後台湾を統治した国民政府にとり日本語を操る「日本人化」された台湾の人々を中華民国の「国民」にするかは一大課題であり［何 2003: 96–97］，さまざまな「中国化」へ向けた文化教育政策を施した。

1945年8月15日から10月25日の新旧統治者の交替が行われた間，住民同士の衝突事件や治安問題は散発的で秩序崩壊に至らず，陳儀政府の台湾移転は順調に進められた［何 2014: 50–51］[18]。10月25日，9月9日に南

16）台湾には大多数を占めるホーロー人，そして客家人，先住民族それぞれの戦争に対する記憶に差異がある。また外省人も多様な民族を含み戦争への記憶も一元的ではない。台湾内部の記憶には多様性があり，その上に中華民国の物語が覆いかぶさり，それに応じる形で台湾としての物語も形成されてきた［川島 2007: 173］。本稿は表出しやすいホーロー人，客家人の視座を追うことになる。なお森田［2015b］は戦後台湾における先住民族の歴史観や記憶について基礎的な説明をしている。

17）1943年時点の段階には日本語理解率が8割に達していた［周 2003: 99］。ただし，この理解率は3ヶ月間「国語講習所」課程に通い「国語」（日本語）を話せるようになる，という官側の定義に基づく統計から導き出されたものであり，実際の状況とは異なると周は指摘する。

18）当時を伝える台南州「終戦処理に関する書類」という簿冊の分析［東山 2011: 258–259］によれば，台湾接収のために台湾に上陸してきた連合国軍に対する台湾総督府の対応（接遇）は，あらゆ ↗

京で調印された投降文書に即して，行政権，軍事権などが台湾総督安藤利吉から中華民国に移管され，行政長官陳儀からの移管を求める要請文書を安藤が受領したという意味の「受領証」が作成された［川島他 2009: 26–27］。

台湾の人々は「祖国」への復帰を歓呼して迎え入れ，自律的脱植民地化の動きを示した。呉濁流の自伝的長編「無花果」には，町中が歓喜の坩堝と化し，進んで中国語の習得に努めた様子が描かれている［呉 1972: 149–158］。医師の韓石泉（1897–1963，台南の人）の自伝は「本省人は抑圧から解放された気分に飛び上がって喜んだ。……一般の民衆は街を飾って爆竹を放って旗を掲げて歓声が沸き起こり，50 年間にわたって抑え続けられてきた鬱積を一挙に爆発させた」［韓 2009: 160–161］と表現している。具体的な様子が青木［2002: 316］（台東の池上で警察官を務めた人物）により記録されている。

> （引用者注：1945 年 8 月 19 日の朝）いつものように起きて，戸外へ出てフッと町の方を眺めた。「ああ，旗が！」「青天白日旗が！」折からの朝日に輝いて，軒並みに翩翻（ヘンポン）と翻っているではないか。俺は一瞬「ドキン」と心臓の高鳴りを覚えた。「ああ，中国の旗だ！」またしても敗戦の現実を，いままた，改めてはっきりと思い知らされた気がした。見ているのに忍び難く，すぐに家に引っ込んだが，深い淵の底へ突き落されたような，何とも言い得ぬ思いであった。「一体，あの旗はどこから持ってきたのだろうか？一体，いつ手に入れたものであろうか？事前に今日あることを予期し，入手していたものであろうか？」……それからというもの，この青天白日旗は，来る日も来る日も毎日各家の軒先に翻っていた。あたかも，我々を嘲笑しているかのように。……

さらに青木［2002: 317–318］によれば，警察官は権力を行使する職のため人々から受ける憎しみも大きく，一部の者がこの際やっつけろと台湾人警官を追いかけ回すことが数度起きたという。他にも，生意気とされていた「内地人」生徒が学校グラウンドに引き出され「本島人」の生徒に殴られ下駄でけられた，教員にも「夜何時ごろどこそこへ来い。来ないと家族に危害を加える」という脅迫状が来た，玄関に置いた自転車が盗まれ家の着物が奪われたといったことがあり，緊迫した空気に包まれた［宮村 1982: 175］。小林警察官吏駐在所（平地勤務の派出所と山地勤務の駐在所を合併した所）に勤務した者は，皇民化運動に力を注ぎ地元住民の信仰を日本祭祀道に求め，小林警察官吏駐在所の裏手に神社（祠）を建立しそれを信仰の的とした。ところが戦争が終わると，すぐさま「小林祠」の破壊が始まり，警官夫妻は生かして帰さないといった声が聞かれ，引揚げ時には十手を持ち「三民主義青年」という腕章を付けた青年らが誰一人としてあいさつせず黙々と待ち構えていたとある［西盛 1982: 251–252］[19]。

人々は競って「祖国中国」の戦後再建に一員として参加すべく，古い「国語」（日本語）にかわる新しい「国語」（中国語）への学習熱を示した［何他 1948: 10］［韓 2009: 160–161］。さらに学んだ「国語」を積極的に使う者もお

↗ る事態を想定して用意周到に総督府の経費により万全を期した準備がなされ，公有私有財産の引継についても現時点での財産をすべて凍結した状態で，引継書類が作成されていた。だが国民学校の接収という末端機関での状態をみると，人員配置や接収の期間を含めて台湾占領統治準備は充分に整っていたとは思えない，とある。

19）他にも池田敏雄［1982: 95］の日記には次が記されている。「（1945 年）11 月 10 日晴……○某中学の教員某の家に台湾人卒業生おしかけ，外へ出よと呼び出し，おじぎをしてあやまれとつめよる。教員某，おじぎをしてこれまでの不当な態度をあやまる。卒業生は満足して行けりと。○旧恨を持ちだし，たとえば台湾人を首にしたなどと，日人の家を包囲して難詰する者あり。……」

り，例えば詩人杜潘芳格の日記（1945 年 9 月 23 日（日曜）（当時 18 歳））［杜潘 2000: 54］より，日本語での筆記から「自分の国の言葉」である「国語」への筆記へ切替えようとする様子みることができる[20]。45 年 10 月 10 日に創刊された『民報』は「瑞祥は天に満ち，大衆は喜びに湧く」，「台湾有史以来未曾有の光景」という表現で，台湾民衆の戦後初の国慶を祝福する様子を形容した。さらに国民政府の国軍第七十軍の進駐は「街角に人だかりがし，歓声が轟く」であり，陳儀の着台は「台北市民は黒山の人だかりのように狂喜し，実に空前の盛況である」と歓迎ブームが報道された［陳 2011: 23］[21]。

知識人らも自律的脱植民地化の動きを示した。駒込［2015: 671–676］の研究から引用すると，45 年 10 月 10 日の中華民国建国記念日「双十節」式典で，林献堂らが日本植民地支配下の惨状とそこからの解放の歓びが出発点とある祝辞を述べた。林は同日創刊の雑誌『前鋒』に，大陸の人々と「同一の歴史」を創造＝想像するための必要不可欠として，帝国日本により葬り去られた者へ哀悼を示しつつ日本人官吏による「惨酷無道」を問う文を寄せている。他にも，「延平学院」（「延平」には鄭成功を記念する意味が込められている）という高等教育機関創設では林が董事長に就任した。主に「台湾語」で講義がなされる脱植民地化の実践の場だった［何 2014: 55–57］。

しかし祖国熱は長く続かなかった。戦後間もなくのインフレのみならず，外省人官員の無能や汚職，横暴，政治の腐敗は台湾社会の国民党政権に対する不満を一層掻き立てた[22]。加えて来台した外省人への失望感や価値，観念の差異もあり[23]，祖国への熱意は徐々に冷めていった[24]。行政機構の継承は大きな問題なく行われたものの，国語力の低さという

20）森田［2014a: 111–113］は「国語への憧憬」という節を立て，国語学習熱という自律的脱植民地化の象徴的な動きを説明している。なお，池田［1982: 80］は 1945 年 10 月 21 日の日記に，「国語（日本語）家庭，改姓名の家庭」の R 女の発言として，「学生連盟で極端に台湾語常用を叫ぶ傾向あるも，今の若い台湾人は完全な台湾語は使えない。使ってもわざとらしく，しかも土語（原文ママ）らしい下品さがある。急に日語を極端に排斥するなど，感情的にならなくてもいいと思う」と記す。これも自律的脱植民地化の光景だが，本稿筆者がみるところ，この台湾語常用の動きはその後広がらなかったようである。この外部からの言語の国語（中国語）を積極的に学ぶ光景とは，韓国朝鮮と異なることが分かる。解放後の韓国朝鮮で日本語を清算することは，単なる言語政策の問題ではなく民族再生と新国家建設の根幹をなす脱植民地化政策の基軸をなしていた。脱植民地化が至上課題であった韓国におけるハングル専用は，ナショナル・アイデンティティの中枢を担う問題だった［尹 2008: 73］。よって日本語の清算＝我々の言語の構築，という図式が台湾では少し歪んで当てはまることになる。

21）なお終戦直後「台湾独立」を目指す動きが僅かだが存在した。しかし総督安藤の反対にも遭い，広く大衆に受け入れられることはなかった［蘇 2007: 57］。

22）松田［2006: 191］によれば，中央は台湾住民を従順で与しやすい人々だと考えたため台湾に精鋭とは言えないわずかな軍隊しか駐留させず，短期間のうちに「中央派閥型党治」の形態をとる中華民国の一地方として再編されていった。

23）何［2003: 224–226］の調査によれば，多くのインタビュー記録のなかに「台湾に来た中国兵は草鞋を履き，鍋や傘をぶら下げている。この様子はまるで敗残兵のようである」とあるが直ちに蔑視するには至っていない。人々の時局への心情変化は風刺詩（1946 年 4 月）「台湾が回復することに大喜び，ところが貧官汚吏は酒色をむさぼり，警察は横暴で悪虐非道，人民の苦しみは尽きることなし」と表現されている。さらに外部（日本人）からの観察だが次が参考となりうる。「……だが，一部の者を除いて大勢は失望感が強いようだ。というのは，日を重ねるにつれて彼ら役人のレベルの低さ，頭脳の幼稚さが目立つようになってきたからである。……われわれが最も驚いたのは，彼らの政治のすべてが賄賂政治であるという事実だ。いま何らかの許可とか，認可とかを受けようとして申請書類を提出したとする。しかし，いつまで待っても回答はない。……ところがここで，『よろしく頼む』と賄賂の包みを添付すれば，『ただちに許可なり認可なりがもらえる』というわけだ。……」［青木 2002: 325–326］

理由で台湾人の自治能力への疑念をあらわし，政策決定の権力ポストから排除され［何 1999: 98］，権限の大きい高級官僚のポストのほとんどは外省人によって占められ反発を招いた［何 2014: 50–51］。

さらに，45 年 11 月日本的な地名をやめ中国的なものに改め[25]，同年 12 月日本式の名前を中国式に「回復」するよう規則（台湾省人民回復原有姓名辦法）が出されているが［薛 2010: 24–25］[26]，本省人に深刻な影響を与えたのが「国語」の転換に関する政策だった。日本統治時代に日本の「国語」教育を受けた人々にとって，「国語」の転換政策は情報を手に入れる手段や表現の道具を失うことだった。46 年 9 月 14 日，中等学校で日本語使用が禁じられ［薛 2010: 37–38］[27]，続いて 10 月 25 日，新聞・雑誌における日本語文芸欄をはじめとする日本語使用が禁止される。これは日本語を通じて知識を獲得したり，表現したりすることができなくなることであり，強い反発があがった［何 1999: 96–97］。

当局と台湾社会の対立・摩擦が高まっていくプロセスは，人々が「祖国」に対し，植民地経験の中で追求してきた独自の中国性への認知を求め挫折した経験だった［若林 2004: 116］。その例が来台した高官やジャーナリストが唱えた「台湾人奴隷化論[28]」である。祖国であるはずの政府当局から日本の 50 年の統治によって奴隷化され悪影響を受けたと批判された台湾の人々は，他の脱植民地化地域と同じアプローチで，かつての植民地支配を批判できなかったのである［陳 2011: 25］。

こうした統治者への不満が 1947 年 2 月 28 日におきた二・二八事件勃発要因の一部となる。事件後，当時の国防部長白崇禧は，教育について「国語，国文を強化し，祖国伝統の道徳と文化を伝え，日本教育の余毒を徹底して排除し，台湾と祖国とを密接に連携をとらせ，台湾と全国同胞の感情を増強させる」［何 2007: 438］と述べている。しかも上述の植民地支配期の経済的抑圧から脱却しようとした現地資産家階層の試みも事件後完全に挫折した［何 2014: 62］。延平学院も開学から半年足らずで学生の事件への関与を理由に閉鎖され，自律的な脱植民地化の動きは断たれてしまう［何 2014: 57］。若林［2004: 114–115］が述べるように，植民地下の台湾人の中国性の追求は 1945 年以後の「中華民族」プロジェクトと「台湾意識」プロジェクトとの調和を保証せず，台湾知識人の独自な中国

24）例えば国語学習への熱意が冷めていく様子は，森田［2014a: 113］の引用した邱家溥「国語問題――趕快学習免致落伍――」『台湾学生』第 1 輯，1946 年，50 頁が次のように描く。「……残念なことに，日がたつにつれ，台胞の国語学習熱も日に日に冷めていった。今日に至り，学校や幾ばくかの国語講習班の他で，一般民衆の国語学習や祖国の事物への問題関心は，急激に落ちている。冷めただけでなく，軽んじ始めている。実に心配かつ最も悲しむべきことだ。」

25）日本の年号，人物に由来する名称（明治町，乃木町等），日本の国威を発揚する名称（大和町，朝日町等），明らかに日本名の名称（梅ヶ枝町，若松町，旭町等）を，中華民族精神を発揚する名称（中華路，信義路，和平路等），三民主義を喧伝する名称（三民路，民権路，民族路，民生路等），国家の偉大な人物を記念する名称（中山路，中正路等）へと変更された［菅野 2011: 39］。

26）台湾先住民族に関しては，菅野［2011: 39–40］によれば中国名を自身で選び届け出ることとされ，同時に日本統治時代の「高砂族」という呼称が「高山族」に改められている。

27）薛［2010: 37–38］には，中等学校では教員，学生への日本語使用を禁じ，中国語を厳格に用いなければならないとあるものの，但し書きとして中国語の横に閩南語，客家語の使用を認めると示されている。

28）日本の統治下で奴隷化教育を受けて，精神に欠陥がある，日本語は話すが「国語」は流暢でなく，「祖国」の事情を理解しないのでマス・マディアの日本語使用は早期に禁止しなければならない，台湾の人々の官吏任用制限は当然で，中央政府が計画中の地方自治の実施も大陸本土と同時にはできないという論である。当時の台湾知識人は強く反発し，新聞・雑誌での批判の他，元抗日活動家を中心に省自治法の制定，県知事・市長公選の早期実施などを求める台湾省政改革運動を始めた［若林 2004: 116］。

性の追求は孤立したものだったのである。

2.2 学校における脱日本化

国民統合において重要な役割を果たす学校では，どのような「脱日本」が進められたのか。植民地期末期には義務教育が完全実施され就学率も約7割に達し[29]，植民地期終了後もその状態のまま中国大陸からの教師の到着を待ちつつ学校運営が進んだ。1945年11月に接収された後も多くの本省人教師は現職にとどまり，日本人教員のポストが来台した外省人の教員に入れ替わり，新たな「国語」である中国語の授業が始まった［何 2003: 80］。戦後すぐの段階から学校教育での自律的脱植民地化はあり得ず（上述の延平学院などの例を除く），当然，為政者が望む国民創造の機関として機能していった。

教育の現場での「祖国化」は，学制，課程，教材の変更などで実施され，それまでの3学期制から2学期制になり，日本時代の「修身」は「公民」へ変更され，専科学校以上では思想教育として「三民主義」が加えられるなどした。1946年1月には台湾全省の国民学校（初等教育）は中央政府の規定に従い，日本を記念するような学校名から，新たに中国式の名称とするよう変更された［台湾省行政長官公署教育処編 1946: 216］。

また，45年12月に台湾省行政長官公署教育処は「台湾省各級学校学年学期帰一辦法（台湾省各級学校学年学期統一規則）」を制定，日本統治時代に創立された各校の創立記念日を廃止し，10月25日の台湾省光復日を共通の記念日（休日）とした。1948年10月に「各級学校学年学期假期辦法（各級学校学年学期休暇規則）」が全国に適用されたことで廃止されたが，台湾省教育庁は先の説明を踏襲し台湾の特殊性を表明した［周 2013: 191］。台湾は中華民国に編入された一地方だが被植民地支配の経験を持つため，日本統治の残滓を排除する措置も見られた。

教育の中身については，1946年2月台湾省行政長官公署教育処編纂『国民学校暫用歴史課本』は編集主旨として，「従来の日本の誤った喧伝を取り除き，学生をして祖国を認識し，現下の世界情勢を理解させ，以て民族意識を呼び起こし，三民主義建設への志望と自信を有らしめるよう導くことを中心とする」と謳い，終戦後，東北・台湾・澎湖諸島等の失地回復は百年来の恥辱を雪いだとする［深串 2014: 65–66］。同年出版の『台湾省中等学校暫用中学歴史課本』も，「我が軍」は大勝を博したと為政者の対日戦争における戦績に触れるが［深串 2014: 66–67］，台湾住民の被植民地支配経験には触れていない。

一方，この時期は後述の50年代以降と比べて，生活郷土としての台湾に根ざした郷土観が幾らか存在した。1948年に中国大陸で改訂した「課程標準」（日本の学習指導要領に相当）の援用があり，『小学時事教学与郷土教学』（1948），『小学郷土教学』（1948）では，郷土とは故郷ではなく，児童が通う小学校所在地の県・市の生活領域で，郷土を生活地域から郷土中国へと拡張しながら捉えることが狙いとされた［林 2014: 202–203］。

社会教育面についてみれば，1946年9月に，台湾省行政長官公署教育処は社会教育の目標を立て，祖国（中国）の言語・文字教育を強力に推進といった社会教育の実施要領を確立している［森田 2008: 40］。実施にあたり台北，台中，台南の神社が省立民衆教育館に改めるなど，日本時代の遺産が民衆教育の場として活用された［何 1980: 207–208］。こうした上からの脱日本化と祖国化に対し，日本語で文学作品を書き続ける黄霊芝は次のように述懐している。

29）植民地統治下台湾の義務教育が完全実施された1943年の時点では，台湾人（普通行政区先住民を含む）の就学率は65.82%，1944年は71.31%であったが，戦争末期は空襲と疎開，動員のため，学校教育はほとんど休止されていた［林 2015: 132–134］。

昭和二十年なる年号が民国三十四年だと呼びかえられた日から，人々は忽ち唖となり聾となり盲となった。何しろ当時，政府の係員が戸別訪問をして台湾人の学の水準を調査したが，私の戸籍簿の教育程度欄には「不識字」（字を知らず）と書かれてしまった。中学で習った漢文など全然役に立たなかったのである。……文盲には字は書けなかったし，迂闊に日本文を書くと思想を疑われてしまいがちだった［黄 2003: 122］。

つまり日本統治期の教育を受けていたとしても一旦白紙にもどされ，再度，教育を受け直させられていたことになる。

だが新聞雑誌の日本語欄が廃止されたといっても，ある教育当局者が「我々は，小学校から大学までの多くの学生が日本語で話をしていると聞いている。我々が住んでいるのはほとんど日本ではないかと疑ってしまう。教師は日本語で説明し，日本語でコメントを書いている。これのどこが中国の教育機関だというのか」［森田 2014a: 115］と語るように，社会から日本語が消え去ってしまうことはなかった。よって統治者からすれば直ちに言語・文化面において台湾を中国の一部とし，かつ脱日本化をはかることは難しかった。

ところが次節にみるように1950年代からは状況が一変する。1949年5月20日，台湾はその後の38年にわたる戒厳令が敷かれ，政府の効果的なコントロールの下，台湾社会は長期的に安定した状態へと入っていく［薛・蘇・楊 2015: 12］。同年末国共内戦に敗れた国民党中央政府が台湾へ移転し，台湾を「大陸反攻」の拠点として戦時状態に置き，本省人への上からの中国人化を一層推進する。そして国是の普及推進に主眼が置かれ，為政者の意思のもと脱日本化が進み，私的な生活領域に「日本」が留まって行くのである。

3. 一大中国化と日本

50年代からの国民党中央政府の台湾移転に伴う「中央化」以後，戦後初期に見られる混沌とした風景から一変し上からの一大中国化時期となり，脱植民地化の代行が貫徹された。日本統治時代の教育を受けた「谷間の世代」の文化的抵抗も公共領域で表出できなくなり，私的生活領域における日本語の意図的使用や短歌・俳句といった日本文芸の愛好などに限られ，谷間の世代にとり中国化プロジェクトの圧倒的な展開に対する自己アイデンティティ防衛のツールとなった。中国化政策のターゲットとなったのは谷間の世代の「次の世代」で，台湾の中国化政策が公教育システムを中心に体系的に遂行され，戦後世代は当時定義される中国性の内部に包摂されていった［若林 2004: 117–118］。そして国語を完全に習得した戦後に教育を受けた本省人は，外省人との言語面の同化をはたし「国語を話す高学歴の台湾人」になったと表現されている［若林 1992: 189–190］[30]。以下でまず学校における一大中国化教育と脱日本化の動きに触れる。

3.1 学校における一大中国化教育と脱日本

1950年6月に教育部から公布された「戡乱建国教育実施綱要（反乱鎮定建国教育実施綱要）」の序文には，「ここに制定する戡乱建国教育実施綱要は，目下の必要性に応じたもの」であり「全国の教育の組織を全て戡乱建国中心にし，偉大な新たな力を生み出す」とある［台湾省政府教育庁 1955: 243］。「戡乱建国」とは，国家は共産党の反乱鎮圧に一切が動員される状態におかれていることを指

30）彼らは巨大なパーティ・ステートの下で徐々に力をつけつつあった台湾総体の発言意欲の増大を体現する層になっていった。この層からは政治的自由の獲得，人権の保障，政治参加の拡充を求める民主化運動の「政治起業家」が生み出され［若林 1992: 189–190］，為政者に抵抗の態度を示すようになる。一例として台湾語にまつわる言語権の主張がある［森田 2015a］。

し，学校において「三民主義教育」を強化することを明示していた。イデオロギー教育が展開された理由として，国共内戦の敗北要因の1つに蔣介石が教育の失敗を掲げたことがある［蔣・劉 2011: 274–309］。1951年には「民族精神教育」という蔣介石の領袖としての地位を強固にして中国共産党に対抗する教育が始まり，教科書の内容は国語・知識・歴史・公民，地理など，全て「反共抗ソ」，「国家指導者の座を強固にすること」の二大項目が主軸とされた［蔡 2006: 38–39］。

森田［2014b: 16］からなかみをみてみると，国民学校（6年制義務教育課程）教科書では，中国共産党は低学年では非人道的で恐ろしい集団だと児童に訴えかけ，中国大陸の人々が自殺や失踪に追い込まれたり殺害されたりする描写がみられる。そしてこの仮定の表象を示すことで，児童に「我々の敵である中国共産党」との意識を深く埋め込ませる意図があった。共産党に抵抗する人々も描き，同世代の中国大陸の児童を登場させて「搾取されている」様子を描く。感情的に「反共」を訴え，中国大陸へ赴きその土地を奪還し，大陸人民を救い出す行動へ移るよう働きかける。

一連の教育がもたらした結果は，ウィルソン［1970: 113–114］による1965年の調査が参考になる。ウィルソンは1965年から翌年春まで4ヶ月かけての調査で，3分の1近くの児童が共産党は敵意の対象である，と認めているとの見解を示した。そして児童は幼いときから外の集合体としての「共産党」に関する教育を受けてきたためだと指摘する。児童は為政者側が提示するイデオロギーを吸収し内面化していった様子が分かる［森田 2014b: 16–17］。

一方，為政者にとりかつての敵国日本を積極的に意識し，新たな「敵」の対象にすることはあまりなかった。つまり当時の敵に関する表象としては，やはり中国共産党などの記述に重きが置かれている。日本への敵意は抗日戦争期に集中するが，再三にわたり描かれるものでもなく，主たる敵と見做す対象への批判材料として日本が用いられていた。教師用指導書にも植民地時期に台湾の人々は日本から様々な差別を受けたと表現し1945年以後の政権による施策は効果をあげていると強調している［森田 2014b: 17］。

中等教育についていえば深串［2014: 67–69］から引用すると，『高級中学標準教科書　歴史』（1955年）は，近現代において「中華民族」が民族精神を発揮し果敢に日本に抵抗したかを描き勝利の戦果を描く。終戦後，「台湾同胞は欣喜雀躍した」と植民地統治下の苦悩を間接的に示唆する。だが戦勝国側の国府が終戦後「以徳報怨」の精神を示し，その道義性の高さを強く印象付ける。『初級中学標準教科書　歴史　第四冊』（1955年）は「遷台」以来の治績として「軍の改造」，「地方自治の進展」，「土地改革の実行」，「生産建設の成就」を掲げているが，深串は旧宗主国日本の茫漠としたイメージが示されるのみと指摘する。

しかも50年代以後の郷土教育は戦後直後とは異なり，「祖国中国」とイコールで結ばれる関係に改められた。郷土台湾の地域性・特殊性には触れず，台湾という生活空間は中国の一部で，広大な郷土としての中国への祖国愛養成が郷土教育の狙いとされた［林 2014: 203–204］[31)]。

以上を教授した教員の証言もある。山本他［2016:29–33］のインタビュー調査[32)]からは，

31）王［2008］のとおり，国民党政権の台湾移転前の領域が「中華民国固有の領土」として地理科目で教授されていた。

32）2015年3月20日，李英茂氏へのインタビュー記録。1929（昭和4）年生まれ，日本統治時代に幼稚園，公学校，中学校で教育を受け中学校在学時に終戦を迎え，戦後は初等教育機関である国民小学で教師を41年間務めた人物の宜蘭（台湾東北）におけるライフヒストリーである［山本他 2016: 19］。

国民党から強いられた教育は，いやいやながらね，生徒に教えないといけない。今から考えるとね，ほんとに生徒にすまない。……授業中にね，「皆さん，蔣介石は民族の救世ですよ」……「蔣介石はこんなに偉大だよ。蔣介石はこんなに尊敬すべき人だよ」って，後で，ほんとに（舌打ち）。心の悩みは。心にはね，いつもさいなまれるけど，しょうがない。もう教員として，そうしないとね。……

と，為政者から求められた教育内容について，当時の圧政を背景にその価値や観念とは無関係の植民地時代生まれの教員が教えなければならない心情の吐露がうかがえる。

まとめると藍［2010: 58–59］の指摘のように植民地経験の記憶が教育の場で継承されず，削除または無視されたことになる[33]。例えば20万人の台湾籍日本兵の歴史は戦後台湾でほとんど知られず，戦争を体験した世代と体験していない戦後世代の共通の国家アイデンティティ形成が妨げられた[34]。これは韓国の状況とは大きく異なる[35]。

公定中国ナショナリズムの教育のもとで本省人家庭の戦後世代[36]は，外省人の同級生と席を並べてようやく中国大陸での抗日の歴史記憶を内面化していった。このことは映画作品にまとめられており，呉念真の自伝映画『多桑』は家庭内における戦前日本世代と戦後世代のイデオロギー衝突を描く［洪 2013: 24–25］。昭和4年（1929）生まれの父が小学校の娘に国旗を描く宿題を手伝った折，中華民国の「青天白日満地紅」の左上の白い太陽を赤く塗りつぶした。娘が兄に訴えると父は台湾語で「白い太陽があるかい」「日本の国旗を見てみろ，何色か」と怒る。娘は国語（中国語）で「何でも日本，日本。汪精衛か。」「売国奴だ！汪精衛だ！」と言い返す。中国語が解らない父は息子に「彼女は何を言ってる？」と聞くが，息子は「別に」とやり過ごす。この一場面からも歴史記憶の断絶がわかる。

同時代的に上に掲げた教育を受けた鄭鴻生（1951年台南生まれ，1969年台湾大学入学，尖閣諸島の領有権を主張する台湾の「保釣」運動（1971年）に参加）は，「若い世代は違うかもしれないが，私たち戦後世代の“初恋”は中華民族精神教育なのだ。後に自分がどう変わろうとも，初恋の影響を徹底的に排除することは困難だ」と当時の政権による教

33）戦後の国民党教育の歴史記述では，大陸反攻が最高の国家使命となり，5,000年の悠久な「中原」の歴史が正統とされた。1911年から中華民国が代表してきた「正統中国」に重きが置かれ，「日本」は日清戦争以来の「国難」をもたらした最大の「侵略者」として位置付けられ，近代史の記憶は国民党史観に取って代わられた。歴史記述の中の「日本」は侵略と虐殺をもたらした8年間にわたる抗日戦争の敵であった［洪 2013: 24］。

34）新興独立国の多くは，戦争の記憶を独立の建国の物語や政府が支持を調達する手段として用いるが［藤原 2001: 191］，台湾の場合，脱植民地化が代行されたためこの図式に当てはまらない。植民地期台湾を経験した者にすれば，他者（為政者や外省人）の戦争記憶が伝えられたことになる。

35）現代韓国でも多くの学生が「日本は我が国を奪い取った国だ」，「韓国人を差別した」，「強制的に徴用した」，「韓国語をかけないようにした」，「多くの物資を奪い取った」など，日本の植民地支配を経験した曽祖父母や祖父母の経験談を通じて，小さいころから日本に対する否定的なイメージを持つ。このような家庭内の反日意識の伝授，継承は，学生の父母世代も経験している。学生の父母も戦後教育を受けた世代で被植民地支配を経験していないが，植民地期に生きた世代の話に併せて，小・中・高等学校で受けた民族主義的かつ反日的な教育を通じて反日意識を体系化してきた［金 2009: 6］。

36）松永［2016: 57–60］は，日本時代以来の世代を8つに分類した「生年による台湾の世代区分（試論）」で各世代の全体的特徴，教育の状況，その日本イメージがどのようなものかを示す。そして1945～60年代生まれは「党化教育／中国化教育」の影響を最も受け，「日本」は親の世代の価値観であり，自らの価値観とのギャップを感じると整理している。各世代の考えをみるうえで，筆者は非常に重要な区分表と考える。

育の影響は拭いきれないことを指摘する［本田 2016: 125–126］。

鄭と同世代の歴史研究者周婉窈（1956–）は「私の経験は相当程度の普遍性があると思う」とし，上述の映画と似通った記憶を語る。少し長めにその経験を引いてみる。

> ……小学校に上がってまもなくのことと記憶する。教室では先生が「われわれには大陸に反攻して大陸同胞の危難を救う神聖な使命がある」と教えていた。私は先生を教科書を信じ，自分も将来この使命のために貢献しなければ，と願うようになった。ところがある晩，父が隣家の人との話の中で「大陸反攻など不可能」と言うのをふと耳に挟んでしまった。当時の私にとってこれはたいへんなショックで，密かに父に腹を立て涙を流し，長く父を許すことができなかった。その実，父にしてみればもし私に聞こえているとわかっていたらこんなことを口にするはずはなかった。彼らは二・二八事件と「白色テロ」の恐怖に肝をつぶされていて，自分の考えを子女に伝えようとは思っていなかったのである。問題は，彼らの態度や考え方が特段に「言説」の形で現れる必要もなく，秘やかに音もなく国民党の教育の効果を帳消しにしていたということである。確かに私は「大陸反攻」については父親に腹を立てたのだったが，われわれの世代もいつの間にか父親世代の影響を受けていた。覚えているのは，子どもの間でよく「誰が日本を負かしたのか」で言い争った。一派はアメリカの原子爆弾のせいだと言い，もう一派は中国の八年の抗戦の功績だと主張した。明らかに前者はわれわれの父親世代の見方であり，後者は国民党の教育の結果である。つまり，台湾社会にははっきり異なった，時には相反するともいえる歴史の記憶と解釈とが存在していたのである。一つは顕れ一つは底流し，時の流れの中で力比べをしていたのである……［周 2005: 106］。

周が述べるように戦後世代の児童は自宅に戻ると，日常的に1つの家庭内で日本統治時代生まれの世代[37]と空間を共にした。そして当時の教育の効果を帳消しにして，台湾の街角から為政者の意思の下で消されつつあった日本統治時代の記憶が自宅で再記憶されるのである。

3.2 社会全般における脱日本化の進展

社会全体を見渡してみると，やはり代行された脱日本化が見られた。50年代以後の台湾と日本は同じ西側陣営に属し，通商関係も活発で［川島 2014: 46］[38]，日本語書籍についても50年4月に許可制の条件付き解禁となったものの51年4月から「台湾省日文書刊管制辦法（台湾省日本語書籍規制規則）」により制限が加えられた［菅野 2011: 189］[39]。

37）松永［2016: 57］は「1920〜1935年生まれ　皇民化の世代」は，物心つくころには抗日運動は壊滅しており，日本的価値観がもっとも深く身についている。日本の教育の影響がもっとも強く，リテラシーは日本語と漢文のみ，日本的な価値観（それも戦時下の）が強い，とまとめている。

38）やまだ［2011: 132］から説明を加えると，1950年代の日本の台湾輸出状況とその枠組みの下での展開とは，50年の通商協定，52年の日華平和条約という2つの枠組みによって日台の経済関係は復活した。一度撤退した旧植民地台湾への日本企業の台湾再進出は，50年代は過渡期で60年代に台湾が経済成長を始めると本格化した。

39）解放後韓国ではまず「倭色一掃」が要求された。それは，「植民地残滓の清算」という立場からは避けられないものであった。50年代以降，李承晩政権下で行われた強力な反日政策と共に，日本の新たな文物（大衆歌謡（レコード）など）の流入も取締りの対象とされた［李 2015: 148］。ただし釜山や南部の沿岸部では，50年代には日本のラジオ放送が，60年代初めには日本のテレビ放送が入り，「各家庭で日本の放送に耳を澄ましている」と報告されるなど，電波越境は韓国のテレビ産業の形成に大きな影響を与えていた。60–70年代はマスメディアの「日本大衆文化禁止」が進んだ［金 2014: 62–87］。必ずしも，韓国における「倭色一掃」が一枚岩の如く直線的に進んでいたわけではない。

日本映画についていえば，50年からは輸入が再開され52年の日華平和条約[40]締結後は市場を席巻する勢いとなった。反共宣伝の目的以外にも政権は教育の利器として映画を重視したが，54年7月から日本映画の輸入は外国映画輸入割当規定によって年24本以下と定められ，最大でも月2本までに抑制された［菅野 2011: 202］。

さらに菅野［2011: 195］によれば，本省籍住民の家屋内に日本統治時代の各種賞状や記念品，日本の軍人や警官と一緒に撮影された記念写真が飾られていると問題視され，「民族意識を強める目的」からそれらを飾らないよう指導すべきと通達されている。日本統治時代に起源を有する伝統は「祖国」すなわち中華民国にとり国恥に過ぎず，汚れた伝統の塗り替えが必要とされたが，それは公的な領域に限らず，私的な領域においても同様の対処が求められていた。台湾各地の神社が次々と忠烈祠に転用されたように［蔡 2014: 236］，台湾に残る「日本」は一転して「中国」に変貌した[41]。その上で，国民党政権はラジオ[42]や映画など日常的に関わる娯楽的な側面から，住民をそのメディアに引き寄せ政治宣伝を進めた。

だが，日本的なるものは残存し完全な除去は困難をきわめた［菅野 2011: 188］。そしてひとたび日本が再来すると，上述の鄭，周の親世代と思われる人々はそれに引き寄せられた。1960年3月，台北の大世界戯院で日華親善を目的とした日本映画見本市が行われた。戦後台湾の初の国際映画祭であり，日本人女優が大挙して来台するなどの娯楽イベントだった。同年，日本大使館と映画界が日露戦争を描いた「明治大帝と乃木将軍」（小森白監督，新東宝制作，1959年）上映のイベントも熱狂となり，日本映画が恒常的に人気を集めていた［三澤 2010: 207–209］[43]。

日本映画は排除すべき対象で，しかも左翼的な内容も含まれ，「反共」を掲げた政権にとり日本映画を媒介とした共産主義思想の流入も警戒すべき対象[44]だったが，日本映画が到来した背景には，相矛盾する基準（「中国化」，「脱日本化」のための排除と，「反共」，

40）全文は14条からなり，その要点は次の通りである。一，両国間の戦争状態を終了する。二，「サンフランシスコ講和条約」第2条に基づき，日本は台湾及び影湖諸島，南沙群島，西沙群島に対する一切の権利を放棄する。三，双方は貿易，海運などの商業に関する条約にすみやかに調印する［遠流台湾館編 2007: 243］。

41）呉［2014］は一次資料を引用し社会からの「脱日本」の経過を述べている。そのなかでも興味深い指摘は，昭和などの元号を消し去ることは当然のことに加え，中華民国暦を用いるよう求めたことである。「1952年」といった西暦の奥付がある出版物は「匪区」（共産党占領地域の意味，即ち中国本土）から到来と疑われ台湾省警務処は各県や市の警察に対し禁じるよう指示している［呉 2014: 82–83］。後年，民主化活動人士は西暦を敢えて使い中華民国の正統性を否定しようとした［呉 2014: 85–86］。

42）ラジオ放送は当局が社会をコントロールする手段として，芸術や娯楽関連の宣伝と政治的宣伝を融合させていた［林 2015: 330–331］。ラジオの登録台数は1952年時点で5万台（20世帯に1台）にすぎなかったが，1962年には100万台（2世帯に1台）へと急速に伸びている［林 2009: 145–148］。

43）1957年には「明治大帝と乃木将軍」とよく似た内容の「明治天皇と日露大戦争」（渡辺邦男監督，新東宝制作，1957年）も大ヒットしている。58年10月に台湾を訪れた日本財界人の発言が残されている。「奥地へ行くほど日本に対する郷愁が深く……日露戦争と明治大帝という映画ですね，……あの映画で陛下が出てくるところがありますな，ある日の事で，劇場の3分の2くらい，その陛下の出るシーンになると起立して帽子をとって，敬意を表したという，そんな話もしてました。」［三澤 2010: 209］

44）放送についても同じで，西側陣営に日本も含まれたが民主主義国家であり言論界は左派思想が主流をなしていた。そのため日本から共産主義的な思想が流入することを嫌い，台湾住民の中に「日本」に特別な感情を持つ者がいることから「日本」からの放送には過度に反応していた。例えば1960年6月NHKが海外放送25周年記念「日本放送友の会」を成立させ，台湾でも「日本広播倶楽部友之会」を設けたが，中国国民党中央委員会では「友之会」を取締るべきと意見が出され，台湾警備総司令部も警戒を強めていた［川島 2015: 305–314］。

「日華関係強化」のための容認）が存在していた［三澤 2010: 216–218］[45]。会場で日本語が幅をきかす状況は，中国化の展開で周辺化された本省人の経験や日本語能力が中心化され，「日華親善」のもと日本映画を楽しみ日本語を使用することが容認された空間だった。一方，普段は中心に位置している外省人や北京語（国語）が周辺化され，本省人はこの逆転を味わい，外省人はそれを醜態と罵った［三澤 2010: 229］。

だが為政者は見過ごさなかった。1961 年 7 月から 10 月まで「桃太郎大戦鬼魔島」（のちに「桃老大伏匪記」と改題）が嘉義市（台湾中部）他中南部の都市，台北市，基隆市など北部で上映された［武久 2006: 46］。「匪」という語を伴う文言は中国共産党を批判的に連想させ，作品の劇場広告や改題名に使われたことは，当然，劇中の鬼と中国共産党が重ね合わせて表現された［武久 2006: 49］。

4．おわりに

代行された脱植民地化という視角から韓国の例を引きつつ，教育への検討を含めながら戦後台湾における脱日本化の全体像をみた。戦後台湾は上からの一方的な中国化と脱日本の国民統合であり，植民地統治を経た台湾の人々の経験には齟齬が生じていた。しかも植民地時代には台湾意識が育まれており［若林 2004: 113］，ゲルナー［2000: 230］のナショナリズムに関する説明「この単位はその中に強固な下位集団をほとんど持たないこと」を引用すれば，戦後台湾社会の公定中国ナショナリズム受容の困難さを考えることができる。

こうした植民地期の人々は，民族精神教育を施された「中華民国に生まれ，国語で学校教育を受け，国民党式の民族精神教育を受けた」その一つ下の世代の人々には理解不可能と映り，世代間におけるアイデンティティの断絶を生じさせた［菅野 2011: 206］。断絶をさらに説明すると次のとおりになる。精神分析学者ヴォルカン［1999］の研究を整理したワン［2014: 75–76］から引用すると，集団のアイデンティティを発達させる要素 2 つ「選び取られたトラウマ」（未来に影を落とす過去の惨事）と「選び取られた栄光」（栄光ある未来に関する「神話」のことで，過去の栄光の再現として理解される）を指摘する。前者は両親や教師などの話によって下の世代へ継承され，次の世代はその出来事の体験なしに過去の世代が味わった苦しみを共有する。しかもワン［2014: 76–78］の研究レビューによれば，アイデンティティの形成に歴史的記憶が果たす役割は 3 つの考え方（原初主義，構築主義，道具主義）があり，構築主義者は両親や祖父母からだけでなく歴史書，マスメディア，学校教育などから自分たちの集団の歴史を学び，人為的にアイデンティティが作り出されるとする[46]。

戦後台湾では脱植民地化が代行された故に，学校では為政者の歴史観，地理観や敵認識が教育された[47]。そして本論部分で引いた洪［2013］の引用する映画，本田［2016］によるインタビュー記録，周［2005］の回想，藍［2010］の研究，山本他［2016］によるインタビュー記録のとおり，植民地台湾での記憶や経験は学校では継承されず断絶し，家

45）日本からの輸入映画だけでなく，1950–60 年代の台湾で製作された映画では，為政者からみた敵としての「過去の日本軍閥」を表現しつつ，「反共としての連帯」や「日華友好」のはざまで揺れ動く様子が見られた［徐 2012: 350］。

46）他に，新井［2016］が日本語でヴォルカンの研究（語り継がれる集団的記憶としての選ばれたトラウマ）を紹介している。

47）現代台湾社会に次の歪な状況をもたらした。薛［2016］は，かつてある国立の高校で「第二次世界大戦中，どの国の飛行機が空襲のため台湾に飛来したか？」とのテスト問題が出され，学生のみならず教師ですら「日本に違いない」と堅く考え譲らなかった逸話を紹介している。

庭内ですら下の世代との共有が難しかった。しかも街からは為政者の意思にそって「日本」が排斥され[48]，二・二八に続く戒厳令と白色テロによる恐怖政治［王 1970: 150］で沈黙を保つなか[49]，そこには植民地時代の被統治者による脱日本化の意思が示されることはなく，それどころか日本たることが自己を保つツールとなった[50]。同じ日本の植民地統治を経た韓国では，民主化以前から「脱日本」が為政者，国民がともに共有されてきたようである。ところが台湾では脱植民地化が代行されたゆえに「日本」が植民地期の記憶や歴史として批判すべき対象とならず，さらに「他者化」されて国民統合の機能を果たすこともあまりなく，相対化されてきたのである[51]。

48）統治エリートのみならず，日中戦争を直に戦った外省人は感情的に日本を排斥する態度を示していた。「まあ要は，彼らが台湾に入る以前の生活水準・教育水準，それこそ 30 年遅れてます，台湾に対して。こういう連中が台湾を支配すること自体に，おれらはもう我慢ならないですよ……彼らが入って来て，民間人が履いている下駄を見たら，即その場で下駄を割ってしまうんですよ……要するに日本人の履物やから。彼らはそこまでやっとるんですよ。……」林清廉（1925 年台湾台中生まれ，1954 年，29 歳で再渡日。日本で台湾独立運動に参加。西宮で中華料理店経営）からの聞き取り［神阪京華僑口述記録研究会編 2010: 135–137］

49）恐怖の統治による沈黙とその後を付け加えると，周［2013: 314］は戒厳令が解除（1987 年）されて警戒も少しゆるむと「誰それは監獄で生まれ育った，誰それは 11 歳の時から監獄に食事を差し入れていた，誰それは毎日駅へ行って銃殺者名簿を横目で見ていた」と，たくさんの物語が語られたと述べる。染川［2009: 100］が C 氏（1925 年生）の川柳について，戒厳令解除後だから柔らかく包んだような表現でも良かったのでは？との問いに対し，「いや，国民党は怖かった。基隆港に上がって来た兵士の怖かったこと，何をするか分からなかった。解放令（ママ）が出ても怖かったし，今でも怖い。何が起こるか分からないから。」染川によれば過去の恐怖政治の記憶であり，俳句会には「政治に関わらない」という暗黙の共通認識が定着していると推察する。また山本他［2016: 26］のインタビュー調査も C 氏と同様の声を掬いとっている。「それから終戦後の時代。終戦後は国民党の政権支配下にあって，その中で動乱というのは，二二八事件がございました。長期戒厳がございました。押さえつけられる。白色テロがございました。もう怖い……。だから，怖い，怖い。そのあれが今も何だか影を引いて，今もまたね，影を潜めてるようでね。」本稿筆者は染川［2009］の指摘に同意し，山本他［2016］の調査を吸収し，さらに今日でもこの「後遺症」ともいうべき心情が台湾社会の底流の一部をなしていると観察している。この点について台湾政治研究者の松田［2016］の分析から学恩を得て補足する。「……40 年以上の長きに及んだ中国国民党政権が，中国の統一と近代化という理想主義的な目標を掲げる一方で，革命のためあらゆる手段を正当化したため，台湾社会に厳しい統制が浸透した結果，民主化を経てもなお，政治的タブーが存在すること，あらゆる問題が政治化しやすいこと，そして『安定した権威主義的統治』への郷愁があることなど，権威主義体制の副作用がいまだ根深い。」

50）元台湾人徴集兵 A さん，1924 年生まれ，台南出身。「戦時中に『日本精神』を考えたことはあるけれど，切実ではなかった。戦後，蔣介石がきて，汚職などもあり，また二・二八事件や白色テロでことさらに『日本精神』とは反対のことを経験し，『日本経験』が浮き上がってきたように思う」［小野 2014: 69］。ある白色テロ被害者の妻（1925 年生，桃園の人）「（原文日本語ママ）結び　塗炭の苦しみに喘いでいた前半生に今も涙ぐむが，頂上に辿りつつある今の私は幸せです。でも自由を苛なまれた前半生に，かげながら見守り，優しい光や力を与えてくださった方々に私は感謝を忘れません。……私は，ほんとうに幸せです。教え児たちも『母さん』とか『婆ちゃん』と，人生行路で如何なる不運に逢っても決して挫けない『成せば成る，成せねば成らぬ，成らぬは人がなさずなり』の日本教育にも感謝する。日本教育の良き教しえを，若い世代にまだまだ教鞭を振り続くつもりです」［許主編 2014: 115］

51）現下の状況について補足すると 2015 年は 1915 年に台湾南部玉井で起きた住民蜂起事件に対する日本側の過剰弾圧事件（「噍吧哖（タパニー）事件」）100 周年で，台南市では記念の催しが行われたようである。よって台湾社会から過去の植民地支配や戦争に付随して発生した国家の非行が忘れ去られたわけではない［若林 2015: 55］。張俊宏へのインタビュー（2013 年）（1938 年中部南投生まれ，国民党の抜擢を受け 1960 年代言論誌『大学雑誌』の編集に携わるが，「党外」（反国民党勢力）の有力者として論陣をはり 1979 年美麗島事件で反乱罪判決を受け，1988 年民主進歩党秘書長，国民大会代表，立法委員など歴任）は次のように批判する。「そもそも，日本は台湾を自分たち　↗

参　考　文　献

アーネスト・ゲルナー（加藤節監訳）2000『民族とナショナリズム』岩波書店

青木説三　2002『遥かなるとき台湾――先住民社会に生きたある日本人警察官の記録――』関西図書出版

新井立志　2016「和解の理論と実践――紛争とトラウマを乗り越える為に政府と市民社会加果たすべき役割――」『ワセダアジアレビュー』18，20-25

有田伸　2011「高学歴化と若者の就業――日本・韓国・台湾における教育と世代の意味――」樋口明彦・上村泰裕・平塚眞樹編『若者問題と教育・雇用・社会保障――東アジアと周縁から考える――』法政大学出版会，3-30

五十嵐真子・三尾裕子編　2006『戦後台湾における「日本」――植民地経験の連続・変貌・利用――』風響社

池田敏雄　1982「敗戦日記Ⅰ・Ⅱ」台湾近現代史研究会編『台湾近現代史』4，55-108

李志遠　2015「第六章　日韓文化交流と「反日」論理の変容――「倭色文化」批判言説の弱化――」磯崎典世・李鍾久編『日韓関係史1965-2015Ⅲ――社会・文化――』東京大学出版会，137-164

ヴァミク・ヴォルカン（水谷驍訳）1999『誇りと憎悪――民族紛争の心理学――』共同通信社

遠流台湾館編著（横澤泰夫日本語版編訳）2007『台湾史小事典』中国書店

王育徳　1970『台湾――苦悶するその歴史――』弘文堂

小野純子　2014「太平洋戦争期，台湾人徴集兵における戦争体験」『人間文化研究』22，63-73

何義麟　1999「「国語」の転換をめぐる台湾人エスニシティの政治化――戦後台湾における言語紛争の一考察――」『日本台湾学会報』1，92-107

何義麟　2003『二二八事件――「台湾人」形成のエスノポリティクス――』東京大学出版会

――――　2011「台湾二・二八事件」和田春樹・後藤乾一・木畑洋一・山室信一・趙景達・中野聡・川島真編集委員『岩波講座東アジア近現代史第7巻――アジア諸戦争の時代1945-1960年――』岩波書店，208-209

――――　2014『台湾現代史――二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』平凡社

川島真　2007「第7章　台湾の光復と中華民国」佐藤卓己・孫安石編『東アジアの終戦記念日――敗北と勝利のあいだ――』筑摩書房，172-195

――――　2014「新時代の日台関係と台湾の日本研究」中京大学社会科学研究所・檜山幸夫編『歴史のなかの日本と台湾――東アジアの国際政治と台湾史研究――』中京大学社会科学研究所，41-59

――――　2015「第2章　戦後台湾の対外ラジオ放送政策」貴志俊彦・川島真・孫安石編『増補改訂戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版，296-315

川島真・清水麗・松田康博・楊永明　2009『日台関係史1945-2008』東京大学出版会

木宮正史　2003『韓国――民主化と経済発展のダイナミズム――』筑摩書房

金恩淑　2009「韓国人の日本認識と歴史教育」『探求』20，6-13

金成玟　2014『戦後韓国と日本文化――「倭色」禁止から「韓流」まで――』岩波書店

金哲（田島哲夫訳）2015『抵抗と絶望――植民地朝鮮の記憶を問う――』大月書店

黄智慧　2003「ポストコロニアル都市の悲情――台北の日本語文芸活動について――」大阪市立大学大学院文学研究科アジア都市文化学教室編『アジア都市文化学の可能性』清文堂出版，115-146

――――　2006「台湾における「日本文化論」に見られる対日観」『アジア・アフリカ言語文化研究』71，147-168

――――（鈴木洋平・森田健嗣訳）2012「台湾における日本観の交錯――族群と歴史の複雑性の視角から――」法政大学国際日本学研究所編『地域発展のための日本研究――中国，東アジアにおける人文交流を中心に――』法政大学国際日本学研究センター，43-70

神阪京華僑口述記録研究会編　2010『聞き書き・

↗　と対等の存在とみなしたことが一度でもあったか。都合のいいときには，甘言を弄して利用するが，都合が悪くなると無視する。実際，多くの台湾人は，日本人が内心で台湾に対して常に優越感を持って馬鹿にしていると感じている。ただ，自分の尊厳にも関わる問題だし，口に出して揉め事の種にしたくないから，あえて言わないだけなのだ。第二次大戦のときに徴用した台湾籍日本兵に対する不当に低い補償など，台湾人が悔しい思いをしたことが何度あったことか。」［本田 2016: 2-9］。だが台湾社会の移行期正義（（中国語）転型正義，（英語）Transitional Justice）に関する主たる批判対象はかつての国民党一党支配時期の圧政にあり［呉 2014］［台湾民間真相與和解促進会 2015］，日本による植民地支配とその戦後処理への言及は皆無に近い。台湾先住民族（原住民族）は，数百年前台湾に渡来した人々により三等人民とされたことまで遡り，主権，尊厳を獲得し，他のエスニック・グループとの平和な共存を目指すことが移行期正義であるとする［聯合晩報 2016］。

関西華僑のライフヒストリー』第3号，神戸華僑歴史博物館
呉叡人　2010「賤民宣言――或いは，台湾悲劇の道徳的な意義――」『思想』1037，114-123
――――　2014「〈声〉なき民を救い，過去を贖う――台湾の経験から考える移行期正義――」『ワセダアジアレビュー』15，30-34
呉濁流　1972『夜明け前の台湾――植民地からの告発――』社会思想社
洪郁如　2013「理解と和解の間――「親日台湾」と歴史記憶――」『言語文化』50，17-29
駒込武　2015『世界史のなかの台湾植民地支配――台南長老教中学校からの視座――』岩波書店
近藤正己　1996『総力戦と台湾――日本植民地崩壊の研究――』刀水書房
――――　2004「国画論争にみる台湾のポスト・コロニアル」『渾沌』1，127-153
蔡錦堂　2014「台湾・日本・中国の「慰霊施設」の研究」中京大学社会科学研究所・檜山幸夫編者『歴史のなかの日本と台湾――東アジアの国際政治と台湾史研究――』中京大学社会科学研究所，225-251
――――（水口拓寿訳）2006「日本統治時代と国民党統治時代に跨って生きた台湾人の日本観」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における〈日本〉――植民地経験の連続・変貌・利用――』風響社，19-59
周婉窈（若林正丈訳）2005「二度の「国引き」と台湾――黒住・木宮両氏との対話――」『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』9，103-116
――――　2013「高一生と父，そしてあの沈黙させられた時代――追想のうちに，わたしたちの歴史の命題を考える――」下村作次郎・孫大川・林清財・笠原政治編『台湾原住民族の音楽と文化』草風館，305-322
周俊宇　2013「戦後台湾における中華民国の国定祝日――国民党政権「正統中国国家」の象徴とその変容――」『東アジア近代史』16，189-214
所沢潤・林初梅編　2016『台湾のなかの日本記憶――戦後の「再会」による新たなイメージの構築――』三元社
ジョン・ボドナー（野村達朗他訳）1997『鎮魂と祝祭のアメリカ――歴史の記憶と愛国主義――』青木書店
菅野敦志　2011『台湾の国家と文化――「脱日本化」・「中国化」・「本土化」――』勁草書房
染川清美　2009「日本語残留孤児の居場所――日本統治後の台湾日本語俳句の空間から――」『大阪大学日本学報』28，89-113
武久康高　2006「「戦後」台湾の桃太郎――映画「桃太郎大戦鬼魔島」（「桃老大伏匪記」）――」『日本文学』55(9)，44-53
張炎憲　2013「白色テロルと高一生」下村作次郎・孫大川・林清財・笠原政治編『台湾原住民族の音楽と文化』草風館，283-304
陳翠蓮（周俊宇・岩口敬子訳）2011「戦後初期における台湾の法的地位問題と台湾人エリートの政治展望『広島法学』34(4)，1-36
杜潘芳格　2000『フォルモサ少女の日記』総和社
中島利郎・河原功・下村作次郎編　2014『台湾近現代文学史』研文出版
西盛佳美 1982「高砂武装隊」台湾協会編『台湾引揚史――昭和二十年終戦記録――』財団法人台湾協会，251-253
東山京子　2011「帝国の崩壊と台湾総督府の敗戦処理」檜山幸夫編『帝国日本の展開と台湾』創泉堂，215-272
深串徹　2014「戦後台湾における「対日関係史」叙述と「歴史問題」――1945-1959年――」『Aoyama journal of international studies』1，61-78
藤原帰一　2001『戦争を記憶する――広島・ホロコーストと現在――』講談社
本田善彦　2016『台湾と尖閣ナショナリズム――中華民族主義の実像――』岩波書店
牧野篤　2011『認められたい欲望と過剰な自分語り――そして居合わせた他者・過去とともにある私へ――』東京大学出版会
松田康博　2006『台湾における一党独裁体制の成立』慶應義塾大学出版会
――――　2016「松田教授が台湾の「鄭南榕と言論の自由」学術シンポジウムで基調講演（2016年4月6日）」東京大学東洋文化研究所ホームページ　http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/news/news.php?id=SunApr101428172016（2016年5月14日閲覧）
松永正義　2016「第一章　戦後台湾における日本語と日本イメージ」所沢潤・林初梅編 2016『台湾のなかの日本記憶――戦後の「再会」による新たなイメージの構築――』三元社，45-60
三尾裕子　2014『日本を含む外来権力の重層下で形成される歴史認識――台湾と旧南洋群島の人類学的比較――』科学研究費助成事業研究成果報告書
三澤真美恵　2010「第7章「戦後」台湾での日本映画見本市――一九六〇年の熱狂と批判――」坂野徹・愼蒼健編『帝国の視角／死角――「昭和期」日本の知とメディア――』青弓社，207-242
宮村堅弥　1982「高砂族の真心」台湾協会編『台湾引揚史――昭和二十年終戦記録――』財団法人台湾協会 175-176
森田健嗣　2008「1950年代台湾における「失学民衆」への「国語」補習教育――元「日本人」の「中国化」の挫折」――」『日本台湾学会報』

10，39-54
――― 2014a 「戦後初期台湾における言語政策研究再考――代行された脱植民地化の視角から――」『日本台湾学会報』16，107-125
――― 2014b 「1950年代台湾における「敵」認識教育」『中国研究月報』68(9)，14-22
――― 2015a 「戦後台湾のオポジションによる言語権の主張――議会の議論に注目して――」『アジア・アフリカ言語文化研究』90，61-78
――― 2015b 「台湾先住民族社会の戦後過程」『アジア・アフリカ地域研究』15(1)，1-19
やまだあつし 2011 「1950年代における日本の台湾輸出」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究』16，119-132
山本和行 2015 『自由・平等・植民地性――台湾における植民地教育制度の形成――』台北，国立台湾大学出版中心
山本和行・樋浦郷子・須永哲思 2016 「戦中戦後台湾における教育経験――宜蘭・李英茂氏への聞き取り記録から――」『天理大学学報』67(2)，19-47
尹健次 2008 『思想体験の交錯――日本・韓国・在日1945年以後――』岩波書店
藍適齊（安部由紀子訳） 2010 「台湾における「大東亜戦争」の記憶一九四三～五三年――当事者の不在――」『軍事史学』45(4)，46-64
劉進慶 2006 「「戦後」なき東アジア・台湾に生きて」『前夜』1(9)，229-246
林果顕（周俊宇・岩口敬子訳） 2015 「第3章 台湾における日常生活のなかの「反共知識」構築」貴志俊彦・川島真・孫安石編『増補改訂戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版，316-333
林琪禎 2015 『帝国日本の教育総力戦――植民地の「国民学校」制度と初等義務教育政策の研究――』台北，国立台湾大学出版中心
林初梅 2009 『「郷土」としての台湾――郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容――』東信堂
――― 2014 「台湾に現れた三つの郷土教育――郷土探し，そして植民地時代の「遺緒」との出会い――」中京大学社会科学研究所・檜山幸夫編者『歴史のなかの日本と台湾――東アジアの国際政治と台湾史研究――』中京大学社会科学研究所，195-221
若林正丈 1992 『台湾――分裂国家と民主化――』東京大学出版会
――― 2004 「台湾ナショナリズムと「忘れ得ぬ他者」」『思想』957，108-125
――― 2008a 『台湾の政治――中華民国台湾化の戦後史――』東京大学出版会
――― 2008b 「試論 日本植民帝国「脱植民地化」の諸相――戦後日本・東アジア関係史への一視角――」黄自進主編『東亜世界中的日本政治社会特徴』台北，中央研究院人文社会科学研究中心，277-305
――― 2011 「台湾との関わり――花瓶の思い出――」鴨下重彦・木畑洋一・池田信雄・川中子義勝編『矢内原忠雄』東京大学出版会，108-129
――― 2015 「異なる歴史観が混在する「親日」台湾の諸相」『外交』32，50-55
和田光弘 2005 「第4章 記念碑の創るアメリカ――最初の植民地・独立革命・南部――」若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史――史誌・記念碑・郷土――』名古屋大学出版会，114-164
ワン・ジョン（伊藤真訳） 2014 『中国の歴史認識はどう作られたのか』東洋経済新報社

◉中国語◉

陳文松 2015 『殖民統治與「青年」――台湾総督府的「青年」教化政策――』台北，国立台湾大学出版中心
管美蓉・王文隆 2011 「蔣中正與遷台初期的教育改造（1949-1954）――以「課程標準」與「大学聯考」為例――」黄克武主編『遷台初期的蔣中正』台北，国立中正紀念堂管理処，3-41
韓石泉（韓良俊編註） 2009 『六十回憶――韓石泉医師自伝――』台北，望春風文化
何容・齊鐵恨・王炬 1948 『台湾之国語運動』台中，台湾省教育庁
何清欽 1980 『光復初期之台湾教育』台北，復文図書出版社
何義麟 2007 「二二八事件対戦後台湾語言政策之影響」『二二八事件60週年国際学術研討会――人権與転型正義学術論文集――』台北，財団法人二二八事件紀念基金会，427-452
蔣永敬・劉維開 2011 『蔣介石與国共和戦』台北，台湾商務印書館
聯合晩報 2016.07.30 「原住民族要求――與台湾政府準国與国関係――」
林果顕 2009 「一九五〇年代反攻大陸宣伝体制的形成」台北，国立政治大学歴史学系研究部博士論文
林桶法 2009 『1949大撤退』台北，聯経出版事業
蘇瑞鏘 2014 『白色恐怖在台湾――戦後台湾政治案件之処置――』新北，稲郷出版社
蘇瑤崇 2007 「「終戦」到「光復」期間台湾政治與社会変化」『国史館学術集刊』13，45-87
台湾民間真相與和解促進会 2015 『記憶與遺忘的闘争――台湾転型正義階段報告――』新北，衛城出版
台湾省行政長官公署編 1946 『台湾省教育概況』台北，台湾省行政長官公署教育処
台湾省政府教育庁 1955 『十年来的台湾教育』台中，台湾省政府教育庁，台北，台湾書店
王恩美 2010 「冷戦時期学校教育中的反共形象

——以台湾與韓国両地小学教科書為中心的分析——」『思與言』48(2), 49–117
王文隆 2008 「台湾中学地理教科書的祖国想像(1949–1999)」『国史館学術集刊』17, 201–246
王文隆・管美蓉 2013 「蔣中正教育観與1950年代台湾教育」, 国立中正紀念堂管理処編『重起爐灶——蔣中正與1950年代的台湾——』台北, 国立中正紀念堂管理処, 191–229
呉俊瑩 2014 「如何稱呼台湾史上的「日本時代」?——兼論戦後日式紀年與意象的清除與整理——」『台湾文献』65(3), 49–98
徐叡美 2012 『製作「友達」——戦後台湾電影中的日本(1950s–1960s)——』新北, 稲郷出版社
許雪姫主編 2014 『獄外之囚——白色恐怖受難者女性家属訪問紀録(中)——』新北, 国家人権博物館籌備処, 台北, 中央研究院台湾史研究所
薛化元 2010 『戦後台湾歴史閲覧』台北, 五南図書出版
——— 2016 「日治時期歴史記憶及其歴史意義」『民主視野』12 http://www.lthsociety.org/index.php?action=visions_detail&id=125&cid=157&ccid=151(2016年4月10日閲覧)
薛化元・蘇瑞鏘・楊秀菁 2015 『戦後台湾人権発展史(1945–2000)』新北, 稲郷出版社
張必瑜 2010 「有国無家的地理想像——戦後初期台湾小学地理教育中的家郷與異郷, 我族與他者——」『台湾文学研究集刊』8, 85–124
周婉窈 2003 「台湾人第一次的「国語」経験」『海行兮的年代——日本殖民統治末期台湾史論集——』台北, 允晨文化実業, 77–125

◉英語◉

Chang, Bi-Yu 2015, *Place, Identity, and National Imagination in Post-war Taiwan*. London; New York: Routledge.
Richard W. Wilson1970, *Learning to Be Chinese: The Political Socialization of Children in Taiwan*. London: The M. I. T. Press.

原稿受理日—**2016年9月13日**

付 記

本稿はJSPS科研費15H06109の助成を受けたものです。